

安全 スマホで閲覧

放射性物質検査結果報告書

一関市藤沢町黄海の館ヶ森アーク牧場とアーク(橋本晋栄代表取締役社長)は、豚肉やソーセージなどの自社商品にQRコードを付け、携帯電話やスマートフォン(多機能携帯電話)で放射性物質検査の結果報告書を閲覧できる取り組みを始めた。商品の安全性を知ってもらうことで、東京電力福島第一原発事故による放射能問題の風評被害対策と、消費者の不安払拭に努める。

商品にQRコード

一関・藤沢アーク牧場

同社では、自社製品の放射性物質検査結果を同牧場の店頭やホームページなどで公表している。これに加え、携帯電話やスマートフォンでも検査結果の内容を見られるようにした。

検査項目はヨウ素131、セシウム134、同137。買い物客は、ブランド肉の館ヶ森高原豚肉やベーコン、加工品のハンバー

商品に付いたQRコードを読み取り、携帯電話やスマートフォンで放射性物質検査結果を確認できる。館ヶ森アーク牧場



同社は「原発事故の風評被害に負けず、お客さまの不安を取り除くためにも、検査を継続的に行っている」としている。

グ、ソーセージなどの全商品に付いたQRコードを読み取り、その場で検査結果を閲覧して安全性を確認することが可能。インターネット販売の商品にもQRコードが付けられる。現在、44種類の検査結果が公表されているという。

5段に佐藤さん(花泉中)

受検者全員が合格

一関市花泉町花泉字地元のセントフランシスラッシュユ暗算検定に合格した。木村正代表取締役が経営するSOROBAN塾ピコ・一関の小学生は、10月に初めて実施されたラッシュユ暗算検定に合格した。県内では同暗算を導入している学習塾は少なく、今回はより高度な能力が必要となる段位の合格者も出た。合格した児童生徒は、自身の学習や進路に役立てようという意気込みで取り組んでいる。同暗算は、日本ラッシュユ暗算検定協会が全国の学習塾で実施。パソコンの画面上に短時間に次々と表示される数字を足し算するもの。検定は最高で10段。上級になるほど数字の桁と足し算の回数が増え、表示時間は短くなる。数字を視覚的に捉え瞬時に計算

このうち佐藤夏美さん(花泉中3年)は幼稚園からそろばんに取り組み、珠算5段、暗算4段(ともに全国珠算教育連盟認定)。3桁の数字が

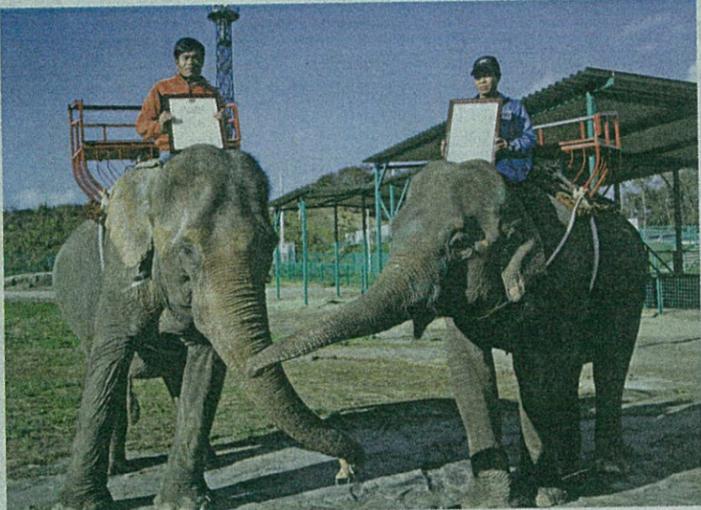


7秒間に10回表示される問題を規定数解き、5段に認定された。数字のスピードについて「まだそれほど速く感じない」と話し、余裕の表情。「入試に向けて資格が欲しいから頑張りたい」と意欲を見せている。

ラオスと日本友好に一役

一関市藤沢町黄海の岩手サファリパークのアジアゾウ、ブンミーとナッドが「日本・ラオス親善ソウ」となり、外務大臣の「名称付与状」を視覚的に捉え瞬時に計算

「ゾウの村」のゾウは21歳でともに雌。外務省の働き掛けやラオス政府の協力などで、同パークへの仲間入りが実現した。ゾウの導入は、被災者の心のケアなどの復興支援と、2015年のラオスの国交樹立60周年記念、ゾウの保護を目的としている。



親善 任せたゾウ

一関・藤沢、岩手サファリパーク 外相から「名称付与状」

「日本・ラオス親善ソウ」となった(左から)ブンミーとナッド。岩手サファリパーク



焼きだてのサツマイモを味わう 本寺保育園児

今年で4回目の秋恒例の行事。同園のバス運転手を務める槻山茂さんが配られると「熱いけどおいしい」「ほっぺたが落ちちゃった」「うん(6)は「とても甘くておいしい。もっとたくさん食べたい」と笑顔で頬張っていた。

ホックホク 緩め

一関・本寺保育園 焼き 芋 会

一関市飯沼町若井原の本寺保育園(高橋政文園長、園児12人)の焼き芋会は26日、同園で開かれた。職員と一緒に「やき芋会」が専用窯で作った焼きだてのサツマイモを味わった。

ミヨウガに赤い実

一関 菅原さん方

一関市山目字立沢の菅原豊造さん(56)方で、赤い実を付けたミヨウガ写真が見つかり、家人らを驚かせている。



自宅の庭先に自生するものの一つで、ミヨウガの花穂の内側がトウガラシのように赤く膨らんでいる。オレンジ色に近い鮮やかな色合いに妻美千代さん(53)と「赤くて不気味」と話のネタにして楽しんでいるという。

ミヨウガは地下茎を伸ばして繁殖するが、夏から秋にかけて高温が続くと実を付けることがあるという。実は熟すと三つに裂け、赤い内面が花びらのように見えるのが特徴。菅原さんは「昨年の震災の影響か、突然変異か…」と首をかしげていた。

仮装姿で 商店巡回

一関・ECCC千蔵

歩いた「写真」。異文化理解につなげようと、周辺商店の協力を受けて毎年実施している

らからあめやチョコレーなどのお菓子を受け取っていた。同日は小学3~6年生

がカボチャで作った「ジャックオーランタン」も教室の入り口に飾り、雰囲気盛り上げた。

同日は、同協議会21世紀塾特別講座「震災復興支援ボランティア公演」

と銘打って開かれ、町内に避難する被災者を含む約150人が来場した。平野さんは、ラフカデ

イオ・ハインの原作を中井常蔵が翻訳・再編した「稲むらの火」を朗読。津波の兆候を察知した主婦、おん(62)が所有する昔ながらの石焼き芋窯で、園児が10月上旬に収穫したサツマイモを焼いた。

園児は名札を付けた爪ようじを芋に刺し、「おいしいかなあれ」と願いを込めて丁寧に窯に入れた。職員と一緒に「やき芋会」が専用窯で作った焼きだてのサツマイモを味わった。

同園近くの郵便局や商店におねかけしたりして焼き上がるのを待った。湯気が立った焼き芋が配られると「熱いけどおいしい」「ほっぺたが落ちちゃった」「うん(6)は「とても甘くておいしい。もっとたくさん食べたい」と笑顔で頬張っていた。

「とても甘くておいしい。もっとたくさん食べたい」と笑顔で頬張っていた。